

日本の社会学系雑誌の知識社会学に向けて (2)

——社会学の3つの状況(多様化、拡散、齟齬)を踏まえての考察——

神戸市看護大学 榎田 美雄

1 目的

この報告の目的は、近年の社会学の3つの状況(①社会学研究者の多様化、②社会学の学知の周辺領域への拡散、および、③学会提供サービスと学会員ニーズの間の齟齬)を概観したうえで、日本の社会学系雑誌の未来を展望しようとするものである。

2 これまでの議論の概観1:主として投稿・査読プロセスに注目して

上記の目的に関連して、報告者は、この数年、連続して複数の論考を書いてきた。その概要を記すと、以下のようになる。

(榎田、2012a)では、「論文投稿学」という研究領域が成立するだろうことを予言する。すなわち、①大学院生の多様化を考えると、③学会がオールインワンパッケージで提供するサービスを、効率が悪いと考える二股所属会員や三股所属会員が増えることは容易に想像できるので、その新状況に合わせて、学会機関誌情報の公開が望ましいだろうことを、大学の入試情報の公開との比較において主張した。(榎田、2012b)では、日本社会学会社会学教育委員会の若手支援に関するアンケート、社会学評論編集委員会の専門委員に対するアンケートおよび、専門委員に対するインタビューを踏まえ、多様性を増している個別会員の志向性をもはや、「学問の発展」という学会の目的に従属するものとしては扱いきれないだろうこと、したがって、査読プロセスの途中における「辞退」を減らすことはなかなか困難だろうことを論じた。(榎田 2013a)では、『保健医療社会学論集』という専門学会の機関誌における編集委員会内部情報を用いて、同誌では、『社会学評論』よりは、1回目査読でD判定になる確率は低いが、結局2回目査読でD判定になるので、最終的な歩留まり率はたいして高くないことなどを論じた。(榎田 2013b)では、学会間競争や雑誌間競争が発生しつつあることを踏まえ、投稿側と査読側の「選択の相互性」が今後深まっていくとの予想から、不満や疑義がある投稿者には、積極的に編集委員会等とコミュニケーションを取ることを奨めた。(榎田 2015)では、「共同研究」由来の投稿の方が、そうでない投稿よりも「掲載率」が高いことに注目して、投稿前の討議や準備の厚みが、査読通過に有利であるだろうことを示唆した。

3 これまでの議論の概観2:学問世界全体の中での社会学の位置の変化に注目して

上述の「これまでの議論の概観1」では、②社会学の学知の周辺領域への拡散、への言及が不十分なので、ここでそこを補っておきたい。社会学は、特定の対象を持たないメタ社会科学になることで、むしろ社会科学全体に対しての「知」の供給者となってきた。そのかわり社会学本体の知の体系化は枠組的にできないまま放置されることになる。そういうなかでは、日本社会学会と諸連辞符社会学会の関係は不安定なものにならざるを得ない。連辞符側は、フリーライダーなのに科学的に高度なのは自分たちだ、という主張をするからである。この問題が、学術誌においても影響してくる。

4. まとめ(省略・・・当日のべます)

榎田美雄 2012a「論文投稿学・序論」『保健医療社会学論集』23-1:3-15。

榎田美雄 2012b『社会学評論』の現況分析『社会学評論編集委員会報告』27-47。

榎田美雄 2013a『保健医療社会学論集』の現状『保健医療社会学論集』24-1:80-87。

榎田美雄 2013b「論文査読の現実」in 須田木綿子・鎮目真人・西野理子・榎田美雄(編)『研究道:学的探求の道案内』東信堂:280-299。

榎田美雄 2015『保健医療社会学論集』の投稿動向と査読動向の分析(2015年3月末集計)『保健医療社会学論集』26-1:73-77。